日本文學全書

第壹編目次

竹取物語
伊勢物語
紫式部日記
住吉物語
徒然草

慕風

明治廿三年四月廿四日印刷
明治廿三年四月廿五日出版
明治廿五年三月廿九日十版

正價金貳拾五錢

版權所有

編輯兼發行者　野口竹次郎
日本橋區本石町一丁目九番地
印刷者　水谷景長
小石川區久堅町百〇八番地
印刷所　博文館印刷所
小石川區久堅町百〇八番地
東京日本橋區本町三丁目
發兌元　博文館

日本文學全書

凡例

一本邦は世界の一舊邦たり。文物夙に開けて、光華維に新なり。されば、その文章も、一時は漢文に地歩を占められしことありといへども固有の美はこれがために壓せられず、却て漢文に比べて優れる所あるに至れり。それ支那の文學は、經子に根ざし、韓柳歐蘇もこれより出づ。日本の文學は、和文に基く、後の文人作家もこれに據らずんばあらず。されども古文學の書、世に乏しくして、得るにかたく、稀にあるものも、誤謬頗多くして解し易からず。今この書を刊行する所以は、人をして、これらの書を得るに易からしめ、讀むに易からしめ、漢文歐文の外、別に一頭地を出せる國文の優秀を知らしめんとなり。

一凡舊本の誤謬は、つとめて善本を集めて對校し、その善きものに從へり。語の解しがたきものは、聊頭註を加へて、これを說明し、名詞その

他は、つとめて漢字を以てし、傍に訓をさしたり。これ皆讀み易からしめんがためなり。

一凡著作の時代、著者の傳記、文章事實の如何は、熟讀玩味せば、おのづから明晰なるべしといへども、また詳なりがたきものあり。よりて每篇の首に解題を加へて、これを說明せり。讀者これによりて、その大意を知悉し、さて後に本文に入らば、刃を迎へて解くおもひあらん。

一本書分ちて十二編となすといへども、本邦の古文學は、これにて足れるにあらず。今はまづ著きものゝみを採れるなり。その漏れたるは、更に續刊の功を遂げて、全書の實にそはんとす。

明治二十三年四月　　編者識

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

竹取物語

解題

この物語は、源氏物語に、もろ〳〵の物語のいで來はじめの祖といひたれば、我國の小說中最ふるきものなり。されど、誰が何時の代に作れりといふことは詳ならず。先哲の考證せし所によるに、延喜以往大同以後の著述ならんといひたれば、大凡紀元千四百年代の末、千五百年代の初にぞあるべき。著者は源順朝臣なりとの傳說もあれど、信じがたし。すべてふるき小說には、作者の知られぬものおほし。これもそのひとつなり。

舊說に、竹の中に人を得たるは、寶樓閣經に、一の寶山に三の仙人あり、三仙人の沒處に三竹を生ず、その竹の中におの〳〵一童子を生ず、容貌端正にして色相成就す、とあり男子を女子にとりなしたるなり。この他華陽國志、幽怪錄、甘蔗氏經、佛說柰女、耆域因緣經などにも、おなじく竹中の人の怪異をしるしたり。また佛の御石鉢は普曜經に出て、龍の珠は太平

廣記に引ける奇傳に載せ、月の都は起世經、龍城錄等に、天羽衣は搜神記に、昇天の事は日本靈異記等に見えたり。この書、これらに據りて作れりといへり。されど上世人の心の幼き時に、深く奇異を信ぜしこと、いづれの國か同じからざらん。古風土記などの中にも、なほかゝる類はおほかり。今强ひて穿鑿するに及ばず。

但し荒唐怪誕の事を種として、曲に哀怨喜怒の情趣を描き、文辭も古澁ならず、明瑩にして意よく透徹せり。特に皇族大臣などいふ、やんごとなき人々の一婦人に愚弄せられ、家をも身をも忘れて色に沈湎せし狀を、憚らず書き出せるなどは、作者當時の世態に慷慨する所ありて、諷規せしものにはあらざるか。これらの所、最作者の意匠を見るべきことなるべし。題名を竹取物語といふは、竹取の翁の物語の畧なり。古人は、タカトリといふべきよしの論もあれど、强ひて拘はるべきにあらず。言ひ馴れたるまゝに、タケトリと呼ばんにしかず。

明治四年十月修正旅行及び刊行を未だ

竹取物語

萩野由之
落合直文 校
小中村義象

八木

野山にまじりては山や野に分け入りての意なり

今はむかし、竹取の翁といふものありけり。野山にまじりて、竹をとりつゝ、萬の事につかひけり。名をば讃岐造麿となんいひける。その竹の中に、本光る竹一すぢありけり。怪しがりて寄りて見るに、筒の中光りたり。それを見れば、三寸ばかりなる人いと美しうて居たり。翁いふやう、われ朝ごと夕ごとに見る竹の中にかゝするにて知りぬ、子になり給ふべき人なゝめりとて、手にうち入れて家にもてきぬ。妻の嫗にあつけて養はす。美しきこと限りなし。いと幼ければ籠に入れて養ふ。竹取の翁この子を見つけて、後に竹をとるに、節をへだてゝ節毎に金ある竹を見つくること重りぬ。かくて翁やう〳〵豐になりゆく。この兒養ふほどに、

すぐ〳〵は俗語のズン〳〵ふに同じく直の字の意なり

髪上は女子生長して始めて結髪するをいふ

裳着すは袴着なり古の婦人は裳を着けたり

帳は几帳の類にて婦人の身を掩ひ隠すものなり

うちあけ遊ぶは手を打ちて歡歌遊宴することなり

男女きらはずは男女に拘はらぬ意なり

よばひは呼ふの意なり人を呼びかげ懸想するよ

すぐ〳〵と大になりまさる。三月ばかりになる程に、よきほどなる人になりぬれば、髪上など沙汰して、髪上げさせ裳着す。帳の内よりも出さずいつきかしづき養ふほどに、この兒のかたち清らなること世になく、家の内は暗きところなく光満ちたり。翁心ちあしく苦しき時も、この子を見れば苦しき事も止みぬ。腹たゝしきことも慰みけり。翁竹をとること久しうなりぬ。勢猛の者になりにけり。この子いと大になりぬれば、名をば三室戸齋部秋田を呼びてつけさす。秋田なよ竹のかぐや姫とつけつ。このほど三日うちあげ遊ぶ。萬の遊をぞしける。男女きらはず呼び集へて、いとかしこくあそぶ。世界の男、貴なるも賤しきも、いかでこのかぐや姫を得てしがな見てしがなと、音に聞きめでゝ惑ふ。その傍の垣にも家の邊にも居る人だに、容易く見るまじきものを、夜は安きいもねず、闇の夜に出でゝも穴を抉り、こゝかしこより覗き垣間見惑ひあへり。さる時よりなんよばひとはいひける。人の物ともせぬところに惑ひありけども、何

り出でたる詞なり

公達は貴族の公子達をいふ

わび歌は戀ひあくみて怨言を含める歌なり

ふりこほりは雪降り氷凍る寒き時をいふ

さはらずはかまはずといふ意なり

のあるべくも見えず。家の人どもに物をだに言はんとていひかくれども、こと〻もせず。傍を離れぬ公達、夜を明し日を暮す人多かり。愚なる人は、益なき歩行はよしなかりけりとて、來ずなりにけり。その中に猶いひけるは、色好といはる〻かぎり五人、思ひ止む時なく夜晝來けり。その名一人は石作皇子、一人は車持皇子、一人は右大臣阿倍御主人、一人は大納言大伴御行、一人は中納言石上麻呂、たゞこの人々なりけり。世の中に多かる人をだに、少しもかたちよしと聞きてい、見まほしうする人々なりければ、かぐや姫を見まほしうて、物も食はず思ひつ〻、かの家に行きてたたずみありきけれども、かひあるべくもあらず。文を書きてやれども、返事もせず。わび歌など書きて遣れども、かへしもせず。かひなしと思へども、十一月十二月のふりこほり、六月の照りはた〻くにもさはらず來けり。この人々、或時は竹取を呼びいで〻、娘を我にたべと伏し拜み、手を摩りの給へど、己がなさぬ子なれば、心にも從はずなんあるといひて、月日を過

さりとも遂に云云よりは五人の男の心なり

志を見えありくは志の深きことなり見られに行くこゝらは此程の意なり

門も廣くとは一門繁昌して子孫多くなるをいふなてふは何とての意なり

一人々々はどちらか一人の意なり

す。かゝればこの人々、家に歸りて物を思ひ、祈禱をし、願をたて、思ひやめんとすれども止むべくもあらず。さりとも遂に男合せざらんやはと思ひて、賴をかけたり。強に志を見えありく。これを見つけて、翁かぐや姫にいふやう、我子の佛變化の人と申しながら、こゝら大さまで養ひ奉る志疎たらず、翁の申さんこと聞き給ひてんやといへば、かぐや姫、何事をかのたまはん事を承らざらん、變化の者にて侍りけん身とも知らず、親とこそ思ひまつれといへば、翁嬉しくもの給ふものかなといふ。翁年七十に餘りぬ、今日とも明日とも知らず、この世の人は、男は女にあふことをす、女は男に合ふとをす、その後なん門も廣くなり侍る、いかでかさる事なくてはおはしまさん。かぐや姫のいはく、なでふさることかをはべらんといへば、變化の人といふとも、女の身もち給へり、翁のあらん限りは、かうてもいますかりなんかし。この人々の年月を經て、からのみいましつゝの給ふことを思ひ定めて、一人々々にあひ奉り給ひねといへば、かぐや

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c

あた心云々はもし男に心がはりは出來ては云々の意なり

かしこき人は貴き人なり

思ひの如くは己が思ふ通になり

極りたるかしこまりを申すとは恐れ多き限りなりと御禮を述ぶるなり

姫いはく、よくもあらぬかたちを、深き心も知らでおだ心つきなば、後悔しきこともあるべきをと思ふばかりなり、世のかしこき人なりとも、深き志を知らではあひ難しとなん思ふといふ。翁いはく、思ひの如くもの給ふかな、そも〳〵いかなる志あらん人にあはんとおぼす、かばかり志疎ならぬ人々にこそあッめれ。かぐや姫のいはく、何ばかりの深きをか見んといはん、いさゝかのことなり、人の志ひとしかッなり、いかでか中に劣勝は知らん、五人の中にゆかしき物見せ給へらんに、御志勝りたりとて仕うまつらんと、そのおはすらん人々に申し給へといふ。よきことなりとうけつ。日暮るゝほど、例の集りぬ。人々或は笛を吹き、或は歌をうたひ、或は唱歌をし、或はうそを吹き、扇をならしなどするに、翁出でゝいはく、忝くもさたなげある所に、年月を經て物し給ふと極りたるかしこまりを申す。翁の命今日明日とも知らぬを、かくの給ふ君達にも、よく思ひ定めて仕うまつれと申せば、深き御心をあらでいとなん申す。さ申も理なり。いづれ劣勝お

やかしきものは見たく思ふものなり

今一人は右大臣阿倍ノ御主人を指す

かくなんばかやうに姫が申したりとなり

聞ゆるやうには申上ぐる通にのべたなり

上達部は公卿等なり

おいらかは手短にの意なり

はしまさねば、ゆかしきもの見せ給へらんに、御志のほどは見ゆべし、仕うまつらんとい、それになむ定むべきといふ。これ善きことなり。人の恨もあるまじといへば、五人の人々もよきことなりといへば、翁入りていふ、かぐや姫、石作ノ皇子には、天竺に佛の御石の鉢といふものあり、それをとりて給へといふ。車持ノ皇子には、東の海に蓬萊といふ山あり、それに白銀を根とし、黄金を莖とし、白玉を實としてたてる木あり、それ一枝折りて給はらんといふ。今一人には、唐土にある、火鼠の裘を給へ。大伴ノ大納言には、龍の首に五色に光る玉あり、それをとりて給へ。石上ノ中納言には、燕のもたる子安貝一つとりて給へといふ。翁難きことどもにこそあなれ、この國にある物にもあらず、かく難き事をばいかに申さんといふ。かぐや姫、何か難からんといへば、翁、とまれかくまれ申さんとて、出でゝかくなん、聞ゆるやうに見せ給へといへば、皇子達上達部聞きて、おいらかにあたりよりだになありきそとやはの給はぬ、といひて倦じと皆歸りぬ。猶この女

あたりよりだに云々は雞頭いはんよりは近邊をも通ることばならぬと何故いはぬぞと怨める意なり

したみくは下巧にて心の中にて工夫するをいふ

作花の枝につけて云々古は貴人に物奉るには花などの枝につけて奉る風俗なりしなり

見では、世にあるまじき心ちのしければ、天竺にあるものももてこぬものかはと、思ひめぐらして、石作ノ皇子は心の玄たくみある人にて、天竺に二つとなき鉢を、百千萬里の程行きたりともいかでか取るべきと思ひて、かぐや姫の許には、今日なん天竺へ石の鉢とりにまかると聞かせて、三年ばかり經て、大和國十市郡にある山寺に、賓頭盧の前なる鉢のひた黑に煤つきたるをとりて、錦の袋に入れて、作花の枝につけて、かぐや姫の家にもて來て見せければ、かぐや姫あやしがりて見るに、鉢の中に文あり。ひろげて見れば、

海山のみちにこゝろをつくしはてみいしの鉢のなみだなかれき

かぐ姫や、光やあると見るに、螢ばかりのひかりだになし。

おく露のひかりをだにもやどさまし小倉の山になにもとめけん

とてかへしいだすを、鉢を門に棄てゝ、この歌のかへしをす。

玄ら山にあへば光のうするかとはちを棄てゝもたのまるゝかな

面なきは面目なき意なり

とよみて入れたり。かぐや姫返しもせずなりぬ。耳にも聞き入れざりければ、いひ煩ひて歸りぬ。かれ鉢を棄てゝまたいひけるよりぞ、面なき事をばはちをすつとはいひける。車持の皇子は心たばかりある人にて、公には、筑紫の國に湯あみに罷らんとて、暇申して、かぐや姫の家には、玉の枝とりになんまかる、といはせて下り給ふに、仕うまつるべき人々、皆難波までおくりしけり。皇子いと忍びてとの給せて、人も數多率ておはしまさず、近うつかうまつる限りして出で給ひぬ。みおくりの人々、見まつり送りて歸りぬ。おはしましぬと人には見え給ひて、三日許ありて漕ぎ歸り給ひぬ。かねて事皆仰せたりければ、その時一の工匠なりける内匠六人を召しとりて、容易く人よりくまじき家を作りて、搆を三重に玄こめて、工匠等を入れ給ひて、皇子も同じ所に籠り給ひて、玄らせ給ひつる かぎり十六そをかみにくゞをあけて、玉の枝をつくり給ふ。かぐや姫のたまふやうに、違はずつくり出でつ。いとかしこくたばかりて、難波に密にもて出で

一の工匠は第一といはるゝ名工なり

内匠は禁裏附の工匠をいふ

十六そは云々この所いかにも解し難く諸説あり或曰知行の十六所を守る倉をあけての意と或曰上に窓を明けてなりと始く疑を存す

のゝしりけりは言ひ騒ぐ意なり

胸つぶれては胸塞るといふにおなし

逢ひ奉るは翁の對面したるをいふなり

これなもは玉の枝もこの歌の意もの意なり

ぬ。船に乗りて歸り來にけりと、殿に告げやりて、いといたく苦しげなるさまして居給へり。迎に人多く參りたり。玉の枝をば長櫃に入れて、物覆ひてもちてまゐる。いつか聞きけん、車持ノ皇子は、優曇華の花持ちて上り給へりとのゝしりけり。これをかぐや姫聞きて、我いこの皇子にまけぬべしと、胸つぶれて思ひけり。かゝるほどに門を叩きて、車持ノ皇子おはしたりと告ぐ。旅の御姿ながらおいしましたりといへば、逢ひ奉る。皇子の給く、命を捨てゝかの玉の枝持ちてきたりとて、かぐや姫に見せ奉り給へといへば、翁もちて入りたり。この玉の枝に文をぞつけたりける。

いたづらに身いなしつとも玉の枝を手をらでさらに歸らざらまし

これをもあいれと見て居るに、竹取の翁走り入りていはく、この皇子に申に給ひし蓬萊の玉の枝を一つの所もあやしき處なく、あやまたずもておはしませり、何をもちてかとかく申すべきにあらず、旅の御姿ながら、我御家へも寄り給はずしておいしましたり、はやこの皇子にあひつかうまつ

人ざまは人柄なり

いとほしは氣の毒になり

ねたくは恨めしなり

り給へといふに、物もいはず頬杖をつきて、いみじう歎しげに思ひたり。この皇子今さら何かといふべからずといふまゝに、椽にはひのぼり給ひぬ。翁理におもふ。この國に見えぬ玉の枝なり、この度はいかでかいなみまをさん、人ざまもよき人におはすなどいひ居たり。かぐや姫のいふやう、親ののたまふことを、ひたぶるにいなみ申さんとのいとほしさに、得難き物をゆかしとなんいひしを、かくあさましくもてくるとねたく思ふ。翁は閨の内玄つらひなどす。翁皇子に申すやう、いかなる所にかこの木は候ひけん、怪しく麗しくめでたきものにもと申す。皇子答へての給はく、前一昨年の二月十日ごろに、難波より船に乘りて、海中にいでゝ、行かん方も知らず覺えしかど、思ふこと成らでは、世の中に生きて何かせんと思ひしかば、たゞ空しき風に任せてありし、命死なばいかゞはせん、生きてあらん限りはかくありきて、蓬萊といふらん山に逢ふやと、涙にたゞよひ漕ぎありきて、我國の内を離れてありき廻りしに、或時は浪荒れつゝ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.c